

特別支援学校音楽授業の比較調査研究

—2011年調査と2023年調査との比較—

Comparative research on music lessons at special needs schools
—Comparison between the 2011 survey and the 2023 survey—

岡 ひろみ

特別支援学校音楽授業の比較調査研究

—2011年調査と2023年調査との比較—

岡 ひろみ

本論文は特別支援学校の音楽授業担当者を対象にした音楽授業アンケート調査の結果と考察である。特別支援学校の音楽授業の多くは、課題別クラスの合同で行われている。音楽授業担当者のうち、音楽免許所持者は約6割、特別支援免許所持者は約6割であり、ピアノを全く演奏できない人も1割弱いる。音楽づくりが学習指導要領に明記されたことを知っている人は5割強、音楽づくりの実践経験のある人は6割である。音楽づくりを実践していない理由は、対象児童生徒には難しいこと、そして担当者自身が音楽づくりを知らないことである。音楽担当者の悩みは、音楽室や楽器の不足と、自分の専門性や授業力の不足である。そのため実効性のある研修を望んでいる。2011年調査と比べると、授業計画時に特別支援学校学習指導要領を参考にしている人が増えたこと、音楽づくりの実践者が増えたこと、今実践していなくても今後はやりたいと思う人が増えたことである。

キーワード：特別支援学校、音楽授業、アンケート調査、音楽づくり、音楽の教員免許

This paper presents the results and discussion of music class surveys administered to music instructors at special needs school. Many of these classes are held jointly in classes based on ability. According to the 2023 survey, approximately 60% of instructors hold music licenses, approximately 60% hold special needs licenses, and less than 10% cannot play the piano. Furthermore, more than 50% of respondents knew that Creative Music Making(CMM) was specified in the curriculum guidelines and 60% had practical experience in CMM. Lack of experience in teaching CMM and the difficulty level of CMM for the target students were indicated as reasons instructors chose not to teach CMM. Other problems noted by the instructors were the lack of music rooms and instruments and their own lack of expertise and teaching skills. For these reasons, instructors would like effective training opportunities for this purpose. Compared to the 2011 survey, the results of the 2023 survey showed that more instructors are referring to the special needs school curriculum guidelines when planning lessons, the number of instructors practicing CMM has increased, and more instructors who are not presently practicing it would like to do so in the future.

Key words : Special Needs School, Music Class, Questionnaire Survey, Creative Music Making(CMM), Music Teacher License

第1章 はじめに

筆者は、2011年から特別支援学校の音楽づくりに関する実践研究を行っている。音楽づくり

とは、欧米で開発されたCreative Music Making (CMM) が基になり、J.ペインターとP.アストン『音楽の語るもの (Sound and Silence)』(1970: 1982) で、創造的音楽学習として翻訳され、音環境を重視するM.シェーファーの影響も受けて日

本に導入されたものである。通常学校では1989年の小・中学校学習指導要領第6次改訂版から「つくって表現」として導入され、2008年に告示された第8次改訂版からは「音楽づくり」として明記されている。特別支援学校小学部・中学部学習指導要領では、通常学校との連続性が改訂の特徴の1つである現行版（2017年告示）で初めて、小学部の2・3段階と中学部の1・2段階に「A表現」の中の「ウ音楽づくり」として明記されることになった。

筆者はこれまでの研究で、音楽づくりは、障害種別・発達段階に関わらず、児童生徒の実態課題を考えた授業内容や配慮を行うことで、自主的な表現活動を保障できることを明らかにしてきた。

本論文では、筆者が実施した「特別支援学校音楽授業に関するアンケート調査」（2023年調査：以下「本調査」）結果を基に、2011年に筆者が実施した音楽授業実態調査との比較検討を交えて、特別支援学校音楽授業の実態と課題を明らかにしたい。

第2章 音楽授業アンケート調査

第1項 調査の目的

2011年に実施した「高等部音楽授業に関するアンケート調査」（以下2011年調査）では、滋賀県内特別支援学校13校を対象にして、高等部での音楽授業の主担当者全員にアンケート調査を実施した。ここでは、特別支援学校における音楽授業の教育課程上の位置づけや音楽担当者の悩み、そして音楽づくりの実施状況と課題を明らかにしてきた。

本調査の目的は、2011年調査から約10年を経たこと、また2017年に告示された特別支援学校学習指導要領に音楽づくりが初めて明記されたことを受けて、改めて特別支援学校の音楽授業の実態を明らかにすることである。2011年調査では、滋賀県内の特別支援学校高等部を対象にしていたが、本調査では、研究対象になる学校や学部を拡げた。本調査は個人情報保護及び倫理面の配慮のため、回答者の属性部分については、数的統計処理を行い、自由記述部分についても個人が特定されない形で記している。なお本調査については実施前に、筆者の所属する大学倫理委員会の審査（研

究倫理2023-01号）を経ている。

第2項 調査の方法

1 調査対象校・対象者

京都府内特別支援学校（聾学校・盲学校、分校等含む）24校、滋賀県内特別支援学校（高等養護学校・聾話学校・盲学校・分校・分教室等含む）17校、合わせて41校にアンケート調査用紙を学部・分教室等分（各校の組織体制に応じて1～5部）郵送配布し、調査対象者が回答後、同封した返送用封筒での返送を依頼した。調査対象者は、各学部等（小学部・中学部・高等部・高等養護学校・分教室・分校・施設内教室等）に所属する複数の音楽授業主担当の中から代表1人に回答を依頼した。代表の選び方は当該学部等に任せた。音楽授業主担当者とは、チームティーチング体制で音楽授業を実施している中で、年間指導計画や学習指導案を提案し、授業の中心指導を担っている教員のことである。回答内容については、2023年度の教育課程や実態に基づいた内容や数値の記入を依頼した。

回収率は、滋賀県内特別支援学校16校（学校回収率ⁱ94%）、39学部（学部回収率ⁱⁱ85%）（内訳：小学部10部（71%）、中学部10部（83%）、高等部・高等特支15部（94%）、学部ミックス（院内学級、縦割り学部編成等）4部（100%））である。

京都府内特別支援学校13校（学校回収率54%）、25学部（学部回収率40%）（内訳：小学部9部（45%）、中学部6部（30%）、高等部・高等特支7部（37%）、学部ミックス（院内学級、縦割り学部編成）3部（100%））である。合わせた回収数は、29校（71%）、64学部（60%）（内訳：小学部19部（56%）、中学部16部（50%）、高等部・高等養護22部（63%）、学部ミックス7部（100%））であった。なお、郵送したアンケート用紙が、回答を依頼する音楽担当者に届かないことも想定されたため、回収率を上げるために郵送配布前にアンケート依頼をメールや電話で依頼した学校もある。

2 実施期間

2023年5月～8月（調査用紙では5月20日締め切りとしていたが、その後に郵送された分も含めて集計している。）

第3項 調査の結果

以下、アンケート調査の設問順に結果を記していきたい。

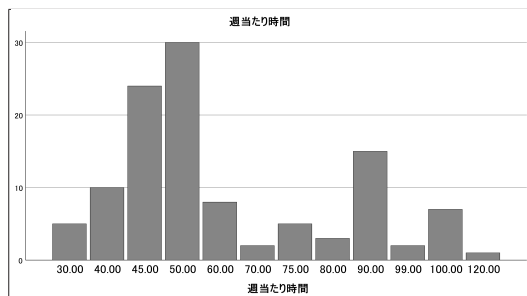
問1(1) 音楽授業の集団編成原理(複数回答可)

音楽授業の集団編成原理は、多い順に「課題別クラス合同」27人31.0%、「課題別クラス毎」23人26.4%、「学年別クラス毎」13人14.9%、「学年別クラス合同」9人10.3%、「学部全体」5人5.7%であった。その他は縦割り学部ユニット・課題別学部縦割り・学部縦割りの音楽目標別・学年合同(基礎・発展の2グループ)・グループ別(知的グループの学年別・個別に病室・音楽と体育の学習課題別)であった。

問1(2) 音楽の授業集団

1人の先生が「担当する授業数」の最小は1クラス担当が39人60.9%、2クラス担当が10人15.6%、3クラス担当が8人12.5%、4クラス担当が5人7.8%、最大が5クラス担当で2人3.1%、また1人の先生が平均1.8クラスを担当していた。「週あたりの授業回数」は、週1回が82人73.2%、週2回が22人19.6%、週3回が6人5.4%、平均1.3回であった。「週当たり授業時間」は最小が30分、最大が120分、平均60.1分であった。また人数が多い順に50分が30人26.8%、45分が24人21.4%、90分が15人13.4%であった。45分から50分授業が、全体の48.2%を占め、90分授業にも山があることがわかる。【グラフ1】参照。

「担当しているクラスの学年」は、小学部では1～6年が同じ授業を受けている学校が6校で小学部全体の32%、中学部は1～3年が同じ授業は11校で中学部全体の65%、高等部では1～3年が同じ授業は13校で高等部全体の72%であった。1学年だけで授業している学校は、高等部単独校と



【グラフ1】

小規模校で13校であった。1つの授業の「指導者数」は最小1人、最大14人、平均3.4人、「児童生徒数」は最小1人、最大109人、平均8.9人であった。学部別では、小学部平均児童生徒数7.1人、平均指導者数3.4人、指導者1人あたりの児童数平均2.1人であった。中学部は平均生徒数7.0人、平均指導者数2.8人、指導者1人あたりの生徒数の平均2.5人、高等部は平均生徒数9.7人、平均指導者数2.9人、指導者1人あたりの生徒数の平均3.3人であった。以上を【表1】にまとめてみた。

「授業の場所」は、多い順に「音楽室」71人63.4%、「教室」20人17.9%、「プレイルーム」8人7.1%である。他には音楽室と教室・教室とプレイルーム・多目的室と自立活動室・病室と音楽療法室と会議室であった。

問1(3) 音楽の教員免許所持と授業担当との関係

1「音楽免許がある先生が担任クラス以外のクラスの音楽も担当している」場合が、25人39.1%、担当していないが29人45.3%で、担当していない人が僅かに多かった。

2「音楽免許のある先生が担任クラスの音楽を担当していない」場合は、13人20.3%、担当している場合が33人51.6%であり、少なくとも自分

【表1】問1(2) 授業回数等

	最小値	最大値	全体平均	小学部	中学部	高等部
週あたり回数	n=112	1回	3回	1.3回	1.3回	1.2回
週あたり時間	n=112	30分	120分	60.3分	58.3分	61.1分
児童生徒数	n=104	1人	109人*	8.9人	7.1人	7.0人*
指導者数	n=103	1人	14人	3.4人	3.4人	2.8人
指導者1人当たり児童生徒数		-	-	2.6人	2.1人	2.5人

*児童生徒数109人は全校数と推測される。

のクラスの音楽は音楽免許所持者が担当している割合は多かった。

- 3 「音楽免許がない先生が音楽の授業を担当している」場合が43人67.2%、担当していない場合が11人17.2%であった。7割近くの人が音楽の免許なしで音楽授業を担当していた。
- 4 「音楽教科専門の先生（専科）がいる」場合が15人23.4%、いない場合が40人62.5%である。専科のうち常勤が6人40.0%、非常勤が8人53.3%であった。非常勤は、準ずる教育課程で運用されている学校ⁱⁱⁱの所属であった。以上4つを【表2】にまとめてみた。

問1(4) 音楽授業の主担当者の数

所属学部内の「音楽授業の主担当者の数」は、最小1人、最大16人、平均4.3人である。1人と2人を合わせて34人55.7%である。本調査は学校規模に関わらず各学部代表の1人が回答する方法であったため、該当学部等に所属する音楽主担当者数を確認するための設問である。つまり回答者数64人に平均値をかけた275人の音楽主担当者が、調査した学校学部^{iv}に所属していることになる。

問1(5) 年間指導(授業)計画作成時に参考にしたもの(複数回答可)

「年間指導(授業)計画作成時に参考にしたもの」は、多い順に「特別支援学校学習指導要領」46人74.2%、「研修会や書籍から得た知識や自分の経験」32人51.6%、「指導内容表や実践のまとめ等、勤務校独自で作成したもの」29人46.8%、「小中高等学校学習指導要領」16人25.8%、「特別支援学校音楽教科書」7人11.3%であった。

問1(6) 音楽の授業で大事にしたいこと(自由記述)

記述内容毎にカテゴリ化した結果を以下のように分類した。なお、1人の回答中に複数カテゴリが含まれる場合は内容毎に各分類に分けて記述し

ている。

1 楽しむこと・浸ること・解放すること

まず多かったのは「音楽を楽しむこと」である。「学ぶよりも楽しい」「音楽する喜び」「音楽を聞くことも表現することも楽しむ」「少し難しいことに挑戦する達成感」「わかる授業、喜びが持てる授業」と書かれていた。また「正しく演奏する、正しく歌うということよりも楽しい雰囲気の中で表情豊かに表現できること」「まずは、正確さ等より楽しいと思えること」「正確な美しさより息を合わせることで一緒に音楽を作る喜びの体験(中略)上手に歌えたり演奏できたりすることではなく、この音が好きだな」と正しさよりも楽しさを重視する回答が複数みられた。また「この曲なんかいいなと思える瞬間を大切に。じっくり音楽に浸る時間を取る」「安心」「雰囲気づくり」「気持ちを解放」「心と体を解き放す時間」「その美しさを感じ親しむ」「生徒の表情は特に大事」「季節感や雰囲気を味わい」「入院生活に少しでも息抜きできる時間にしたい」と音楽の心地よさに浸り、児童生徒の気持ちを解放することを大切に回答も複数あった。

2 領域に偏らないこと

「鑑賞や歌唱、リズム表現、器楽を取り入れ、学校でしか取り組めない音作り」「様々な音楽や楽器」「普段の生活で触れない音楽に触れる」「生の音楽」「本物の楽器」「幅広い音楽」「できるだけ多くのジャンルに触れることで自信を持ち」「好きな音楽の世界を拓け」「卒業後の趣味や生活につながる」「興味関心を拓け」と領域やジャンルを拓ける大切さが書かれていた。

3 指導者が行う配慮点

個々の児童生徒への配慮として「一人一人の音の聞こえ具合、発声時の正しい言語指導」「個々

【表2】問1(3) 音楽免許の有無と音楽授業担当者との関係 n=64

1 音楽免許有り	2 音楽免許有り	3 音楽免許無し	4 音楽専科	
45.3%	51.6%	17.2%	62.5%	40.0%
他クラス担当無し	音楽授業担当有り	音楽授業担当無し	いない	常勤専科
39.1%	20.3%	67.2%	23.4%	53.3%
他クラス担当有り	音楽授業担当無し	音楽授業担当有り	いる	非常勤専科
15.6%	28.1%	15.6%	14.1%	6.7%
無回答	無回答	無回答	無回答	無回答

の障害特性や実態」「生活年齢」「聴覚過敏」「音を聴いた時の表情の動きや目の動き」「音や音色、楽器の感触を味わっている表情の変化」「挑戦してみたいという気持ち」「音楽的な発見や感動」を大切にすること、また教材選択時には「音楽的知識」「音の重なり」「旋律・歌詞が歌いやすく美しい曲」「季節感」「生徒の能力に少しの負荷がかかるぐらい」「音楽の持つリズムやメロディー」を大事にすべきと書かれていた。

4 主体的な自己表現

「自己表現」「子ども自身の表現」「主体的に表現」「主体的に取り組む」「自ら楽器を鳴らす」「自分なりの表現を楽しめる」「感じたことをどんな形で表現できる」「生徒それぞれの感じ方や表現の仕方」「のびのびと自己表現」「生徒からの発信を引き出す」「自身の心を表現」「自分でできた実感ややりごたえ」「表情豊かに表現」と子ども自身の主体的な自己表現の大切さについて書かれていた。

5 他者との関係

「合唱、合奏など皆で合わせる」「集団を大切」「友達と一緒に」「全員が参加」「音を通じた他者とのかわり」「中学生の場合は仲間と一つのことを作り上げていく過程や仲間との達成感」「友達と音を合わせる」「みんなでリズムを合わせる」「他者と調子を合わせる」「他者との関わり」と、指導者や友達との関わり大切さが書かれていた。

6 身体を使った体験的な活動

「体験的活動」「動くこと」「身体を動かして」「実技中心」「身体的活動」「体を使って表現」「生徒のリアクションや動きなどに合わせた」と音楽に身体活動を取り入れる大切さが書かれていた。

問1(7) 学習指導要領での明記について

2017年度告示の特別支援学校学習指導要領音楽に「音楽づくり」が初めて明記されたことを「知っている」が35人54.7%、「知らなかった」が28人43.8%、無回答1人で、知っているが僅かに多い結果となった。

問1(8) 創作、音あそび、作曲等の音楽づくり経験

これまでに音楽づくりの実践経験が「あった」人が37人57.8%、「なかった」人が25人39.1%であった。

問1(9) 音楽づくりの具体的な内容(自由記述)


書かれた内容をカテゴリ化して分類してみた。

【資料1】参照

1 作詞・作曲(アプリ使用含む)

「作曲(リズム・メロディー作り)」「日本の音階から旋律を作り箏で表現」「子どもが作曲したメロディーにアレンジ」「誰もが知っている短い曲を使って変奏」「クラスのテーマソング作り」「二重奏に編曲」「5つの和音進行の上にメロディーを創作」「ペンタトニックでのメロディー作り」「ベース、伴奏、主旋律、合いの手の4パートに分かれて創作」「卒業の歌作り」「GIGA端末でロイノートでの簡単な曲作り」「歌詞の一部を好きな言葉に」「生徒たちの作詞に曲をつけて文化祭で発表」等の作詞・作曲の活動である。

2 リズム表現・打楽器アンサンブル

「ボディーパーカッション」「のリズムに言葉をつける」「身体リズム表現」「歌詞にできそうなワード選び」「一定のリズムや言葉のフレーズに合わせて音を鳴らす」「歌詞等にリズムやフレーズを当てはめる」「音の強弱や楽器の音色の組み合わせを友達と考える」「即興でリズム作りや模倣」「タンブリンアンサンブルとグループ毎にリズムカードを使って2~4小節程度のリズムを考え互いに発表」「トガトンを使って1人ずつリズムをつけて音をつなげていく」「言葉(音韻)と口唱歌による打楽器演奏」「打楽器や手拍子で創作」等のリズム表現活動である。

3 効果音作り

「短い話に合った効果音」「動画やイラストにあった音」「絵本をもとに楽器で創作」「ストーリー性のある音楽で楽器選び」等の効果音作りである。

4 その他

「身近にある物で音階」「ペンタトニック音階や琉球音階で鍵盤楽器演奏」の音階作り、「偶然できあがったものを楽しむ」「色々なものの音、どうすれば音が鳴るか」の音探し、「あずき、米、大豆等様々な素材を透明な箱に入れて3パターンリズムでの歌作り」「ビーズ玉・豆・米などの音を聴き、マラカスやレインスティック作り」等の楽器作り、「指導者の奏でる曲にあわせて」「自分で選んだ楽器を奏でる」「サブ指導者の真似をしてリトミック的動作」「ドレミの歌に合わせてベ

ルハーモニー」「肢体不自由児に大量の葉を広げた上に車椅子でゆっくり動かした秋の音」等が書かれていた。

問1 (10) 音楽づくり経験がなかった理由

多い順に「考えたことがないから」7人26.9%、「対象生徒には難しいから」6人23.1%、「機会があればやろうと思っていた」6人26.9%、「どんなことをすればよいかわからないから」4人15.4%であった。「対象生徒にはやさしすぎるから」は0人であった。

問1 (11) 今後の音楽づくり

今までは音楽づくりの実践経験はなかったが今後は「したいと思う」が19人76.0%、「思わない」が6人24.0%であった。

問1 (12) 音楽づくり理論や実践を知る機会

これまでに音楽づくりの理論や実践を知る機会が「あった」人が24人38.7%、「なかった」人が38人61.3%であった。

問1 (13) 音楽づくりの理論や実践を知った場所

多い順に「研修会（ワークショップを含む）」13人59.1%、「以前の勤務校」6人27.3%、「今の勤務校」3人13.6%、その他は10人45.5%で、内訳は大学（院）での授業が8人で多く、教育雑誌や実践の参観もあった。【表3】にまとめた。

【表3】問1 (13) 音楽づくりを知った場所 n=23

1 今の勤務校	3人	13.6%
2 以前の勤務校	6人	27.3%
3 研修会（ワークショップ他）	13人	59.1%
4 その他	10人	45.5%

問1 (14) 音楽づくり理論や実践の内容

大学の授業や研修会での内容が書かれていた。【資料2】参照。

問1 (15) 今後の音楽づくりに必要なこと(複数回答可)

多い順に「音楽づくりのワークショップ（実技）」46人75.4%、「必要な楽器をそろえる」28人45.9%、「音楽づくりの研修会（理論）」24人39.3%、「アドバイザーの派遣」17人27.9%、「演奏家の派遣」10人16.4%であった。【表4】にまとめた。

【表4】問1 (15) 今後、音楽づくりに必要なこと n=61

1 演奏家派遣	10人	16.4%
2 アドバイザー派遣	17人	27.9%
3 必要な楽器をそろえる	28人	45.9%
4 音楽づくり研修会（理論）	24人	39.3%
5 音楽づくりワークショップ	46人	75.4%
6 その他	3人	4.9%

問1 (16) 音楽づくりについて思うこと(自由記述)

記述された内容毎にカテゴリ化した結果を、以下のように分類してみた。

A 音楽づくりの良い点

「意外な表現や、柔らかな表情を浮かべ予測した反応を超える効果が期待できる」「児童は自分だけの音楽をつくることは割と楽しんで取り組んでいる」「リズムにちょっとしたフレーズだけで楽しめる」「楽しいだけではなく、音楽ができる行程がその人の考え、個性が出やすい」「型を捨てて、子どもたちの想像力に任せた音楽の良さをじっくり楽しみたい」「演奏レベルに合わせた楽譜を作り、作り上げていく達成感と楽しさを感じられるよう工夫」「自由な発想OKなので音楽苦手な子はうれしい」と書かれていた。

B 音楽づくりの難しさ

音楽づくりの難しさとして、以下のような内容が書かれていた。

1 児童生徒の力のレベル

「本人たちの経験が少ないと創造力も乏しい」「自由やイメージが難しい」「音の重ね方、選別、効果等の思考を深めるところは難しい」「言葉のリズムにする等の手立ても難しい」「条件をつけた創作で達成感を持てる作品は難しい」「重度児童生徒の指導」「音楽づくりの名称が、発達年齢の幼い子どもや教育に携わっていない人や保護者にはイメージできない」と書かれていた。

2 体制上の課題

「一人の授業者以外に複数の教師の支援が必要」「一人学級のため広がりにくい」と書かれていた。

3 専門性がないこと

「音楽理論をある程度理解している音楽科教員でなければ難しい」「音楽の免許所持者が少ない」「専門的なスキルがないと音楽を教える意味を考

えられない」と書かれていた。

C 今後の工夫点

音楽づくりを行うときの工夫点として、「理科の単元「音」など他教科と関連付ける」「電子機器やアプリで」「楽器の演奏状況をリアルタイムで見てテンポを変更」「一定の規則性のあるリズムで」「演奏家と一緒に」「パーツのよせあつめではなく音楽的な感動体験を」「一人一人の表現を大きなまとまりにしてある程度の枠を決める」「選択肢を提示」と書かれていた。

D よくわからないからもっと知りたい、教えて欲しい

「集団によって違う」「教科書の音楽づくりは難しく創造性が少ない」「手探り状態」「勉強不足」「イメージがわからない」「アイデア不足」である。このため、「具体的な実践例・興味を引き付ける方法・自由に楽しく創作する方法・周りの教師を巻き込む方法・サブ指導者と思いを共有する方法・音符がよめなくても楽しめる教材・Vocaloidなどの楽曲制作ソフト・自由な発想表現の方法」、あるいは「楽器づくりも音楽づくりか」と具体的なことも含めてもっと知りたいと書かれていた。

問1(17) 音楽研修会への参加希望(自由記述)

希望する音楽研修会の内容を以下のようにカテゴリ毎に分類した。

1 音楽づくりの研修

「音楽づくり」「思いや意図をもって音楽を作る」「遊びや即興の組み合わせ」「実践例の紹介」「バンドミュージックの音を使った創作」等の音楽づくり関係の研修が書かれていた。

2 ワークショップ

「重度・発達障害・肢体不自由の子ども達向き」「実技ワークショップ」「教材紹介」「和太鼓」「授業に生かせる具体的な内容」「体験できる」研修への希望が書かれていた。

3 タブレットやオンライン研修

「タブレットを用いた授業実践」「楽曲制作ソフトやアプリ」「ICTを活用」「オンライン授業」等のICTに関する研修が書かれていた。

4 リトミック

「リトミック」「音楽療法」「ダンス」「楽器演奏のポイント」に関する研修が書かれていた。

5 その他

「知的・視覚・聴覚・高等支援学校・高学年への歌唱指導・身体的に制限のある生徒・重度の生徒」等の「障害種別や発達段階別の興味関心を拡げるため」のテーマ別研修会や、「授業の組み立てや評価」について、「他校の公開授業」等、あるいは「どのような内容でも研修の数やチャンスが少ないのでできるだけ参加したい」と書かれていた。

問1(18) 音楽の授業についての悩みや考え(自由記述)

回答された内容をカテゴリ化して、以下に分類してみた。

1 授業内容や自分の授業力について

対象とする生徒の難しさとして「聴覚過敏・聴覚障害児・肢体不自由児・重度障害児・何事にも消極的な生徒・飛び回る自閉の子・できることが限られている生徒・自由表現ばかりの生徒・集中力が続かない生徒・成果が明確でない活動に飽きる生徒」等が挙げられ、集団の難しさとしては「聞こえの差がある集団・少人数の集団・人数が多い・幅広い発達年齢・各生徒の特性や能力に差がある中で焦点を絞りにくい・大きい能力差・大きな音やガシャガシャした大きい音が苦手な児童と一緒に・複数クラス合同で取り組む・待ち時間を楽しむ工夫」等について知りたいと書かれていた。

そして以上のような実態の生徒達に「音符を教えるべきか・興味の持てる鑑賞教材や器楽合奏は何か・歌唱時の男女バランスをどうするか・興味を拡げる方法・扱いやすい楽器・生の音を大切に生き生きと楽しめる方法・自分できた達成感を持つ・身体を使った表現・音楽を通した友達とのコミュニケーション・音楽を表現する楽しさのための基礎から発展と発表・生活年齢にふさわしい教材・生活年齢と発達年齢と両立できる活動内容」ができる授業を行いたい。そのために「授業のバリエーションを増や」したいが、「本物の演奏指導や教材選択や選曲が難しい・担当者の力量や伴奏技術がない・本物の楽器はない・結果が分かりやすく達成感が味わいやすい活動ばかりになりがち・学校が求めているものが分からない」等の現状がある。また授業の目標や評価に関しても「目標の

置き方・評価・音階のある楽器の演奏評価・子どもたちに伝える内容や意味」の難しさが挙げられ、その問題解決のために「他学年や他学部の音楽授業見学」等で授業力を付けたいと書かれていた。

2 授業体制や環境

「支援学校では免許のない指導者が教えることが多いが免許所持者が指導すべき・専門の先生がいない・専門や免許保持者がいない」等の音楽の免許に関する悩み、また「授業が2週に1回のため積み重ねが難しい・楽器の演奏を教える補助教師がいない・楽器の数と古さと少なさと保管状態の悪さ・音楽室がなく周りの教室に迷惑・自分の楽器で補っている・一人学級や少人数学級のため大集団で取り組めない・Zoom等のオンライン授業・もっとツールが欲しい・ICTを使った授業づくり」等の体制や教育環境整備についての悩みが書かれていた。

3 語り合う仲間

「音楽の授業作りについて交換したり深めたりする教員が少ない・自分の判断で手探り・可能な目標を見つけるべく生徒を観察中・周りの理解・他の先生方の実践や考えを知る機会がない・もっと交流したい」と語り合う仲間が少ないことへの悩みが書かれていた。

4 その他

「コロナ禍を経て今後は様々なことに挑戦したい」等、コロナ禍に関する悩みも複数書かれていた。

問2 回答者の属性

問2(1) 教職経験について

講師を含む教職経験は、最頻値は10年で7人11.1%、短い人で1年、長い人で40年、平均17年であった。

問2(2) 勤務した学校種別や学部

多い順に「特別支援学校高等部」39人62.9%、「特別支援学校中学部」38人61.3%、「特別支援学校小学部」37人59.7%、「中学校」19人30.6%、「小学校」13人21.0%、「高等学校」10人16.1%、幼稚園は1人1.6%、その他は「英国の公立学校・特支重心教育部」であった。

問2(3) 音楽授業の経験年数

「これまでの教職経験の中での音楽授業の担当

当経験」で、最も短い人は4ヶ月、長い人は40年であり、平均は12年であった。

そのうち、「現所属学部での主担当経験」で、最も短い人は4ヶ月、長い人は30年、平均4年であった。

問2(4) 楽器の演奏経験

「回答者自身の楽器の演奏力について主観的な判断で」回答された結果である。平均値については数値が小さいほど「できる」人が多いことを示している。以下、平均値の小さい順に示した。

1 ピアノ

多い順に「よく演奏できる」30人47.6%、「少し演奏できる」20人31.7%、「あまり演奏できない」6人9.5%、「全く演奏できない」6人9.5%であった。「よく演奏できる」と「少し演奏できる」を合わせて79.4%、平均値1.8である。

2 エレクトーン

多い順に「全く演奏できない」21人37.3%、「少し演奏できる」18人28.6%、「あまり演奏できない」11人17.5%、「よく演奏できる」10人15.9%であった。「よく演奏できる」と「少し演奏できる」を合わせて44.4%、平均値2.7である。

3 ドラム

多い順に「全く演奏できない」26人43.3%、「少し演奏できる」16人26.7%、「あまり演奏できない」14人23.3%、「よく演奏できる」4人6.7%であった。「よく演奏できる」と「少し演奏できる」を合わせて33.3%、平均値は3.0である。

4 ギター

多い順に「あまり演奏できない」22人32.3%、「全く演奏できない」21人35.6%、「少し演奏できる」14人23.7%、「よく演奏できる」2人3.4%であった。「よく演奏できる」と「少し演奏できる」を合わせて27.1%、平均値3.1である。

5 ウクレレ

多い順に「全く演奏できない」30人51.7%、「少し演奏できる」16人27.6%、「あまり演奏できない」9人15.5%、「よく演奏できる」3人5.2%であった。「よく演奏できる」と「少し演奏できる」を合わせて32.8%、平均値3.1である。

6 バイオリン

多い順に「全く演奏できない」41人69.5%、「少

し演奏できる」12人19.4%、「あまり演奏できない」6人10.2%、「よく演奏できる」は0人であった。「よく演奏できる」と「少し演奏できる」を合わせて20.3%、平均値3.5である。

7 その他

よく演奏できる楽器は「チェロ・テナーサクソ・フルート・箏・クラリネット・ホルン・打楽器系・リコーダー・トランペット」であった。少し演奏できる楽器は「ユーフォニアム・リコーダー・三線・フルート・箏・マリimba・クラリネット・ベース・リコーダー・アコーディオン・太鼓（和太鼓・ジャンベ）・サクソ・シンセサイザー・ハープ・ダルシマー・チェロ」であった。「あまり演奏できない」楽器は、「チェロ」が挙げられていた。

楽器毎の人数は、多い順に「木管・金管」8人、「琴」4人、「マリimba・太鼓等の打楽器」4人、「チェロ・ベースの弦楽器」4人、「リコーダー」3人であった。【表14】参照。

問2(5) 中学校・高校・大学で音楽関係の部活やサークル所属の有無

「所属していた」人が、36人59.0%、「所属していなかった」人が、25人41.0%であり、所属していた人が多かった。所属していなかった人の中には、音楽大学であったので部活までは入っていなかったと書かれていたものもあった。

問2(6) 所属していた部活名

多い順に「吹奏楽（プラスバンド）」25人69.4%、「合唱」14人38.9%、「アカベラ」「軽音楽」「オーケストラ」3人8.3%、「邦楽（箏曲・太鼓・雅楽等）」2人5.6%であり、ハンドベルは0人であった。【表5】にまとめた。

【表5】問2(6) 所属していたクラブ n=38

1 吹奏楽	25人	69.4%
2 軽音楽	3人	8.3%
3 邦楽	2人	5.6%
4 オーケストラ	3人	8.3%
5 合唱	14人	38.9%
6 アカベラ	3人	8.3%
7 その他	2人	5.6%

問2(7) 所持している教員免許

圧倒的に多いのが、「中学校音楽」が41人

67.2%、「特別支援学校」39人60.0%、「高等学校音楽」32人52.5%、次いで「小学校」19人13.9%、「中学校社会」7人11.5%、「幼稚園」6人4.4%、「中学校国語」2人3.3%、「中学校英語」3人4.9%、「中学校保健体育」2人3.3%、「中学校数学」1人1.6%、「高等学校社会」3人4.9%、「高等学校英語」3人4.9%、「高等学校国語」2人3.3%、「高等学校保健体育」2人3.3%であった。

問2(8) 特別支援教育における音楽について(自由記述)

記述されていた内容をカテゴリ化して、以下に分類してみた。

1 もっと知りたい、学びたい

「音楽の授業について改めて考えるともっと知りたいと感じた」「音楽を通して新しい発見や驚きなどを毎回見だせたらと思う」「私自身も音楽の活動についてもっと学びたい」「自立活動を主とした授業の取り組みや進め方」「教育課程にのりつつ、その子にとっての音楽がより成長するように心の底からの音楽が奏でられるように共に学びたい」「音楽が苦手な子にとっても楽しめる方法」「比較的、音楽の学習は子どもにとって受け入れやすく楽しいものである」「楽しめる工夫を考えたい」「地域の学校とは異なり特別支援学校では現場の教師の実践経験やアイデアの引き出しが大変求められる」「子どもはもちろん教師も楽しい実践となるよう、みんなで学べる場を期待したい」と意欲的な意見が書かれていた。

2 授業内容の悩み

「中学部・高等部の場合、認識の若いクラスでは子ども向けの曲が好きで身近であるが授業では扱えない」「歌、曲など子ども達にとってなじみのあるものの評価」「選曲や題材が難しい」「教師による評価の違い」「教師の主観や趣味に偏る」と授業内容に関する悩みが書かれていた。

3 音楽授業の位置づけ・教育課程

「教科としての音楽と余暇としての音楽の区別」「実態に合わせての指導」「音楽専門の教員が少ない」「生徒の実態幅が大きい」「コース制の導入と今の教育課程の整合性」「本校や県内での文化的な行事が少ない」「行事等で授業が欠ける」「音楽科の先生でなくてもできる」と書かれていた。

4 大事にしていること

「一人ずつ丁寧にやさしく向き合う・常に体と心の状況をサポートする担任教諭と共有し相談・個々のレベルに合わせて無理をさせないで自然にレベル向上・地域の中学校でリコーダーは運指が上手にできなくてもまずは持って構えなさいといわれた生徒の気持ちがつらい・同じ目標を持つ仲間と伸び伸びと音楽体験を分かち合い・自分の気持ちを表現する力や皆と一緒に取り組む力を養いたい・成功体験を少しずつ積み重ね友だちや先生に認められることで自信を持たせたい・音楽が好きな生徒や心の支えである生徒が多い」と音楽の教育課程に関して書かれていた。

5 音楽授業の難しさと魅力

「聞いてリズムはわかっても身体での表現が難しい子」「聞いているのかわかりにくい子」「受け止めたことをモニターの数値で判断する子」等の活動内容や評価の難しさが書かれていた。その一方で、「歌うことや楽器演奏だけではなくダンスや鑑賞と分野は広い」「難しく考えずまず自ら楽しんで授業をすれば良い」「音楽は素晴らしいもの」「人類にとっての宝」「生活や人生を支える歌や好きな音や心地よい動きに出会い、再現・再創造するような音楽活動」「形を整えるのではなく参加する」「一人一人の息遣いとそのつながりや変化が感じられるような発見と感動を一緒に創り出していく」「枠組みや見本は提示しつつ子どもたちが自分で音楽や歌表現を楽しめる」「音楽はルールや決まりが理解できないと難しいのではなく、自分なりの表現や楽しみ方が周りの人に共有されていく喜びがある」「日常の中で素敵な音楽を楽しんで過ごす生徒が、自分だけの世界に浸るだけでなく他者とのコミュニケーションを広げていく」「自分の表現が認められ自信をつける」「一人一人が自信をもって表現することの喜び」「卒業後の生活を豊かにする」と音楽に関する魅力も多く書かれていた。

第4項 クロス分析結果

次に、項目間のクロス分析を行った結果を示してみたい。

1 指導要領の明記と音楽づくりの経験《問1(7)

と問1(8)》

まず「指導要領の明記を知っている」と「音楽づくり経験」との関係进行分析してみた。「指導要領への明記を知らず、音楽づくり経験もない」人は17人27%、「明記は知らないが音楽づくり経験はある」人は10人16%、「明記を知っているが音楽づくり経験がない」人は8人13%、「明記を知り音楽づくり経験もある」人は27人44%であった。つまり指導要領の明記を知らない人は音楽づくり経験もない人が多く、反対に指導要領明記を知っている人は音楽づくりも経験している人が多いことが示された。この結果を【表6】に示した。

【表6】問1(7) 指導要領への明記を知っている人 と 問1(8) 音楽づくり経験があった人とのクロス集計表

	問1(8)なかった		あった	
問1(7) 知らなかった	17人	27%	10人	16%
知っていた	8人	13%	27人	44%

次に音楽科と特別支援学校の教員免許所持の有無と各項目間関係を分析してみた。

2 免許所持の種類と指導要領明記との関係《問1(7)と問2(7)》

所持免許の種類と「指導要領の明記を知っている」との関係进行分析してみた。明記を知っている人の割合は回答者全体では54.7%であるが、「中学音楽免許所持者」は63.0%、「高校音楽免許所持者」は、60.0%と高かった。また「特別支援免許所持者」は70.0%とさらに高かった。この結果を【表7】に示した。

【表7】「免許所持」と「指導要領明記」とクロス分析

	全体	音楽免許あり	特別支援免許あり
知っている	54.7%	中学 63.0% 高校 60.0%	70.0%

音楽や特別支援の免許所持者は特別支援学校学習指導要領で書かれている内容への意識が強いことが推察される。

3 免許所持の種類と音楽づくり経験との関係《問1(8)と問2(7)》

次に所持免許の種類と音楽づくり経験との関係を分析してみた。音楽づくりを経験した人は回答者全体の中では57.8%であったが、「中学音楽免

許所持者」は70.0%、「高校音楽免許所持者」は72.0%で高い割合を示し、「特別支援免許所持者」は60.0%で全体平均より少し高い結果となった。また2011年調査では、音楽免許所持者で音楽づくり経験者は71.0%であり、本調査と同じ傾向が示されていた。音楽の免許所持者の方が大学等で音楽づくりに触れる機会が多く、授業内容への関心が高いことが推察される。この結果を【表8】に示した。

【表8】「免許所持」と「音楽づくり経験」とのクロス分析

	全体	音楽免許あり	特別支援免許あり
2023年調査	57.8%	中学 70.0% 高校 72.0%	60.0%
2011年調査	49.0%	71.0%	-

4 音楽免許所持と担当授業数との関係《問2(7)と問1(2)》

1人の先生が担当する音楽授業数の全体平均は1.80クラス、「音楽免許所持者」は1.95クラスであり、音楽免許所持者との差は僅かである。音楽免許所持者であっても他のクラスの音楽まで担当することは少ないことがわかる。これは特別支援学校の音楽授業の特徴であるといえる。

第3章 考察

以上の調査結果及び分析をもとに、特別支援学校の音楽授業の実態と課題を考察していく。なお2011年調査と重なる項目については、本調査との比較検討も行った。

第1項 問1について

1 音楽授業の編成原理

音楽の授業集団編成は、クラス単独と合同を合わせた課題別集団編成が57.4%を占めている。また課題別と学年別を合わせたクラス合同が41.3%である。つまり、クラスは課題別で編成されることが多く、音楽授業はクラス合同で取り組まれていることが多い。なお学部全体で取り組まれていたのは小規模校であった。2011年調査では、課題別集団編成が9割近くあったことと比べると、本調査での課題別集団の割合は減っている。これは本研究対象が高等部単独校や盲聾学校も含んでい

るため、学年別編成の割合が多い結果となったのであろう。【表9】にまとめた。

【表9】問1(1) 集団編成原理 n=64

	2011年調査	2023年調査
1 学部全体	0%	5.7%
2 課題別クラス毎	26.5%	26.4%
3 課題別クラス合同	63.3%	31.0%
4 学年別クラス毎	4.1%	14.9%
5 学年別クラス合同	4.1%	10.3%
6 その他	-	11.5%

2011年調査の基礎集団は課題別クラス毎に入れている。

2 授業時間

本調査では小学部の平均授業時間は週に1.3回でのべ60.3分、中学部は週に1.2回でのべ58.3分であった。これは、通常学校の小学生の音楽科標準時数^{iv}が週2回45分、中学校週1回50分と比べると、小学部では少なく、中学部では若干多いことになる。また週1回45分が21.4%、50分が25.9%で合わせて47.3%、週2回計90分が13.4%で大きく2つの山があった【グラフ1】参照。2011年調査では、40分から60分が57.5%、60分から120分が19.2%、120分以上が8.2%で分布幅が広がったが、本調査では、学校による違いが少なくなり、画一化してきている傾向が読み取れる。【表1】参照

3 授業場所

本調査では、音楽室は63.4%、教室17.9%、プレイルーム7.1%、その他11.7%ではあるが、2011年調査では音楽室が27.4%、教室が47.9%、プレイルームは9.6%、その他は13.7%であり、本調査の方が音楽室の使用割合は2011年調査に比べると2.3倍多くなっている。さらに比較する調査対象を同じにするために本調査から高等部だけ抽出してみると74.6%になり差は大きくなり、2011年調査の2.7倍であった。本調査では、音楽免許所持者の割合が高かったことから、音楽免許所持者が優先して音楽室を使用していることや高等部単独校でクラス数が少ないため音楽室を利用できる可能性が高かったことが推察される。【表10】にまとめた。

【表10】問1(2) 授業場所 n=112

	2011年調査	2023年調査
音楽室	27.4%	63.4%
教室	27.9%	17.9%
プレイルーム	9.6%	7.1%
音楽室と教室		4.5%
病室と教室とプレイルーム		2.7%
自立活動室		0.9%
多目的室	その他	0.9%
音楽療法室	13.7%	0.9%
教室とプレイルーム		0.9%
会議室とプレイルーム		0.9%

4 音楽免許の有無と授業担当との関係

音楽免許のある先生の45.3%が他のクラスは担当せず、自分のクラスの音楽を担当しないことも20.3%ある。一方、音楽免許のない先生が音楽授業を担当することが67.2%ある。先のクロス分析(第4項-4)の結果も合わせて、特別支援学校では音楽免許所持者が音楽授業を担当するとは限らないことが改めて示されたことになる。ただし、本設問については無回答者の割合が6.7%から28.1%と高いことを考えると、回答者である音楽担当者が学部全体の音楽免許の有無や授業担当者を把握しきれなかったことも推察される。【表2】参照

5 年間指導計画作成時に参考にしたもの

2011年調査で多かった「学校独自の年間指導計画」77.6%が、本調査では21.8%に、また「自分の音楽経験や知識」についても73.5%から24.1%に激減している。反対に2011年調査では少なかった「特別支援学校学習指導要領」が20.4%から74.2%に激増していた。また「特別支援学校音楽教科書」については2011年調査の2.0%から5.3%に微増しているが依然として少ないことを示している。

また2011年調査では、音楽免許所持者が「自分の音楽経験や知識」を参考にしたのは86.0%であり、音楽免許のない人で「自分の音楽経験や知識」を参考にしたのは70.0%であった。本調査では、音楽免許所持者で「自分の音楽経験や知識」を参考にしたのは56.0%、音楽免許のない人で「自分の音楽経験や知識」を参考にしたのは45.0%であった。音楽免許のある人は自分の経験や研修会での知識を参考にする割合は高い傾向は両調査とも同じであるが、本調査ではその割合は下がっている。何より

も本調査での特徴は学習指導要領の占める割合が高く、各校の教育課程検討委員会等が作成している独自の教育課程を参考にしている人が少なくなっていることである。本傾向については今後、教育課程の自主編成^vとの関係で更に分析を進めたい。

【表11】にまとめた。

【表11】問1(5) 参考にしたもの n=64

	2011年調査	2023年調査
1 小中高学習指導要領	12.2%	25.8% ↑
2 特支学習指導要領	20.4%	74.2% ↑↑
3 特支音楽教科書	2.0%	11.3% ↑
4 研修会や自分の経験	73.5%	51.6% ↓
5 校内独自の指導内容表	77.6%	46.8% ↓↓
6 その他	12.2%	4.8%

6 音楽の授業で大事にしたいこと

本調査で最も多かった回答は「楽しむ」ことであったが、2011年調査でも「楽しさ・リラックス」が最も多かった。次に多かった「主体的な自己表現」については、2011年調査でも「表現力・主体性・自信」として分類される回答者が多かった。

また本調査で回答された内容から抽出できるキーワードは、「個々のニーズ」「様々な領域での活動を保障」「仲間と合わせる楽しさや達成感」「卒業後も含めた日々の生活を豊かにする」である。これは2011年調査でのキーワードである「関心を広げる」「友達と一緒に活動を大事にする」「生活年齢に応じた内容」「身体で表現する本物の音楽」と同様の内容が示されている。

ここで少し「音楽の正しさ」について言及してみたい。本調査では「正しさ」について記されていたのは、聾学校教員の「発声時の正しい言語指導」のみであり、これは聴覚障害教育の重要な柱である発声・発話訓練との関係が大きい^{vi}。ただしこの「正しさ」も「一人一人の音の聞こえ具合」や「仲間と一緒に演奏を合わせることの大切さや楽しさ」と併記されている。小学校学習指導要領解説では、例えば低学年歌唱分野では「音程が不確かだったり、一定の速度を保てなかったりする傾向」があるため「正しい音程感覚」が必要、さらに「ていねいに発音」「きれいな発音」「正しい音程やリズム」が記されている。しかし特別支

援学校学習指導要領音楽では、「正しく」と記されている箇所はなく、「歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、歌唱表現に対する思いを持つこと」（小学部3段階表現）、そして「音や音楽に楽しく関わる」ことが、学びに向かう力として記されている。特別支援学校音楽の1つの特徴と言えるであろう。

7 学習指導要領の明記や音楽づくりの実践経験

本調査では学習指導要領への明記を知っている人が54.7%、音楽づくりを経験した人が57.8%いる。2011年調査での音楽づくり経験が49.0%であったことから、僅かに現場での認知度は上がっている。しかし注目すべきは、問1(5)で特別支援学校学習指導要領を参考にしている人が74.2%いるにもかかわらず、指導要領に音楽づくりが明記されたことを知らない人が43.2%もいることである。第4項-1の結果から、明記を知っている人と音楽づくり経験との相関性は高いことを考え合わせると、音楽づくり実践を広めるためには、現場の先生方がまず「知ること」が必要であることが示されている。つまりここでも音楽授業に関する研修機会の必要性が示されているといえよう。

8 音楽づくりを経験してこなかった理由と研修の必要性

次に、音楽づくりを経験してこなかった理由を考察してみたい。2011年調査では「対象生徒には難しいから」が40.0%で最も多く、次に「機会があればやろうと思っていた」が20.0%、「考えたことがなかった」が16.7%、「どんなことをすれば良いかわからなかった」が12.0%であった。本調査でも「考えたことがなかった」とともに、「対象生徒には難しいから」と回答した人が多かった。**【表12】**にまとめている。

【表12】 1 (10) 音楽づくり経験がなかった理由 n=26

	2011年調査	2023年調査
1 対象生徒には難しいから	40.0%	23.1%
2 対象生徒にはやさしすぎるから	0%	0%
3 考えたことがなかった	16.7%	26.9%
4 どんなことをすればよいかわからなかったから	12.0%	15.4%
5 機会があればやろうと思っていた	20.0%	26.9%
6 その他	12.0%	15.4%

この結果と、問1(12)で、音楽づくりを知る機会がなかった人が圧倒的に多かったこと、かつ機会があればやろうと思っていた人や、どんなことをすればよいかわからないという人が一定数いることと合わせて考えてみたい。

筆者は、音楽づくりは、発達段階や障害等に合わせた活動内容や配慮を行うことで、個々のニーズに合わせた主体的な音楽表現活動が可能であることをこれまでの実践研究で示してきた。本調査結果は、こうした音楽づくりの理念や具体的な活動内容を研修会等で知る機会があれば、音楽づくりの実践者が増えることを示している。つまり大学(院)での授業等で知る機会がある音楽免許所持者だけでなく、音楽免許を所持していない先生への実践形式での研修会の必要性を示している。竹下ら(2018)の聞き取り調査においても、音楽担当教員の悩みは特支独自の目標達成に起因したものが多く、ニーズに則した研修会の必要性と意義が示されている。

9 音楽担当者の悩み

2011年調査の音楽担当者の悩みは、自分が音楽の専門外であることや、授業内容や方法に関する悩み、生徒の課題の幅広さや、生活年齢に合わせた授業の難しさ、楽器や設備の不足に関する内容が書かれていた。本調査でも特別支援学校の音楽授業の実態は同じである。つまり、音楽担当者は対象児童生徒に応じた教材で、楽しく自己表現の達成感を味わわせたいと望んでいることが両調査ともに示されている。しかし現実には、音楽の免許の有無にかかわらず、限られた指導者数で実態幅の広い大きな集団に臨機応変に対応できる授業力が求められている。さらに音楽室や楽器等の施設設備も整っていない状況である。

また2011年調査では示されていなかった本調査での特徴としては、音楽担当者は、語り合う仲間を求めていることである。これは職場の多忙化が影響していることが推察されるが、その要因についてはさらなる考察が必要である。

第2項 問2 回答者の属性

1 教職経験

2011年調査での教職経験は平均13年であり、教

職に就いて10年までの若い層が50.0%を占めていた。本調査では10年までの層が39.7%、平均17年であり年齢層の偏りはなかった。

2 勤務した学校種別や学部

本調査と比べると、2011年調査は若い層の割合が多く平均勤務年数も短かったことから、必然的に経験している学部の割合は少なかった。2011年調査では特別支援学校の経験は約3割、本調査では約6割である。また本調査では小中高の3学部全てに経験した人は47.0%、小中の2学部は65.0%、小高の2学部は62.0%、中高の2学部は63.0%であった。この結果を【表13】にまとめてみた。

【表13】問2(2) 勤務した学校学部 n=62

	2011年調査	2023年調査
1 幼稚園	0%	1.6%
2 小学校	8.2%	21.0%
3 中学校	18.4%	30.6%
4 高等学校	24.5%	16.1%
5 特別支援学校小学部	36.7%	59.7%
6 特別支援学校中学部	38.8%	61.3%
7 特別支援学校高等部	22.4%	62.9%
8 その他	6.1%	4.8%

3 楽器の演奏経験

2011年調査では、演奏できる楽器は回答者の多い順に、ピアノ、エレクトーン、ギター、ドラム、バイオリンであった。本調査でも、ギターとドラムの順位が入れ替わっている他は同じであった。

また音楽免許所持者の場合は、ピアノを全く演奏できない人は0人であったが、エレクトーンは7人17.0%（高校7人23.0%）、ギターは9人22.0%（高校6人20.0%）、バイオリンは23人56.0%（高校16人53.0%）、ドラムは13人32.0%（高校9人30.0%）、ウクレレは18人44%（高校14人47%）であり、音楽免許所持者でも全く演奏できない楽器があると回答した人は2～6割あった。

一方、音楽免許を持っていない人で、ピアノを「よくできる」と「少し演奏できる」を合わせた人は8人42.0%（高校17人59.0%）、ピアノをまったく演奏できない人は6人32.0%（高校6人21.0%）である。演奏できる楽器はエレクトーン2人11.0%（高校9人32.0%）、ギター3人16.0%（高校6人21.0%）、バイオリン0人0.0%（高

校3人10.0%）、ドラムは3人16.0%（高校6人21.0%）、ウクレレは6人32.0%（高校10人36.0%）であった。注目すべきは、音楽の主担当をしても、ピアノが全く演奏できない人が2011年で7.0%、本調査でも9.5%いることである。【表14】に両調査を比較した。

4 所持免許

音楽免許所持者は2011年調査では中学音楽が28.6%から67.2%^{vii}、高校音楽が28.6%から52.5%^{viii}に上がっている。しかし注目すべきは、それでも6割にすぎないことである。これは特別支援学校音楽授業の大きな特徴である。また特別支援学校免許については、2011年調査と比べると55.1%から60.0%^{ix}に上がっている。令和元年の文部科学省の調査では特別支援免許所持率は83.0%であり、文科省は免許保有率100%を目指して取り組みを進めている^x。さらに本調査の分析結果では、中高音楽免許所持者が特別支援学校免許を所持している割合は、中学校音楽免許所持者で23人56.0%、高校音楽免許所持者で15人47.0%であった。この結果から音楽の教員免許所持者は、特別支援学校免許を所持している割合は、相対的に低いことが分かる。この点についても、音楽専科の存在や、大学での免許取得課程との関係等、今後の検討が必要である。

以上の結果を【表15-1】【表15-2】にまとめてみた。

第3項

1 音楽づくりに取り組まない理由

ここで問1(10)「今まで音楽づくり経験がなかった理由」や、問1(11)「今後はやってみようか、その理由」、そして問1(16)「音楽づくりについての自由記述」での回答から、音楽づくりに取り組まない理由をまとめてみたい。まず1つ目は、対象児童生徒にとっての難しさである。対象児童生徒の認識力から、「自分がやるべきこと」や「自分が作った作品の理解が難しい」、また対象児童生徒の障害特性から、「創造性」「想像性をもって」「自由表現やイメージを持って発表することは難しい」と書かれていた。2つ目は、担当者にとっての難しさである。「創作や発表す

るまでの時間数を確保できない」「サブ指導者の援助や理解を得ることが難しい」等の体制上の問題、加えて「担当者自身の専門的な理解」や「具体的なスキルがない」「授業イメージが持てない」ことが要因としてあげられていた。

2 音楽づくりに取り組む理由

一方、既に音楽づくりに積極的に取り組んでいる人の理由をまとめてみたい。音楽づくりは「音楽が苦手な子にとっても簡単な工夫で、自分で作り上げる楽しさと達成感」があり、「子どもの創造性や意外性や個性、そして他者とのつながりを大事にすることができる」。さらに「担当者の予想を超える表現に出会えることもある」「自分の内にあるリズムを楽しむことで人とつながるコミュニケーションは人間性を豊かにする」と書かれていた。

また本調査結果から明らかになったのは、指導要領の明記を知っている人は、今まで音楽づくり

経験がなくても、全員が、今後は音楽づくりをやるだろうと答えていることである。さらに音楽づくりの経験も、指導要領への明記も知らなくても今後はやるだろうと思っている人は、やらない人よりも多かった。その理由は、「これまでの担当者が本校で実践していた」「創作する楽しさを伝えたい」「音楽づくりに適切な実態であれば取り入れたい」「音楽の自由な発想を大切にしたい」と書かれていた。つまり、これまでの対象生徒には難しいと思っていたが、実際に見たり聞いたりして音楽づくりの良さを知ると、今後はやってみようと思っているのである。音楽づくりの経験が実際になくても、音楽づくりへの意欲と志向性が大きく関係しているのである。

また「今までは考えたことがなかった」「どんなことをすれば良いかわからなかった」けれども、今後はやってみようとする理由としては、子どもの実態に合わせて「自由に表現する創作活動が楽しそう」

【表14】問2(4)演奏できる楽器

	1 よく演奏できる	2 少し演奏できる	(1+2)演奏可能	3 あまり演奏できない	4 全く演奏できない	平均値
1						
ピアノ(2011年)n=43	23.3%	44.2%	(67.5)	16.3%	16.3%	-
ピアノ(2023年)n=62	47.6%	31.7%	(79.3)	9.5%	9.5%	1.80
2						
エレクトーン(2011年)n=42	0%	33.3%	(33.3)	33.3%	33.3%	-
エレクトーン(2023年)n=60	15.9%	28.6%	(44.5)	17.5%	37.3%	2.72
3						
ドラム(2011年)n=41	2.4%	12.2%	(14.6)	19.5%	65.9%	-
ドラム(2023年)n=60	6.7%	26.7%	(33.4)	23.3%	43.3%	3.03
4						
ギター(2011年)n=43	4.7%	14.0%	(18.7)	34.9%	46.5%	-
ギター(2023年)n=59	3.4%	23.7%	(27.1)	32.3%	35.6%	3.05
5						
ウクレレ(2023年)n=58	5.2%	27.6%	(32.8)	15.5%	51.7%	3.14
6						
バイオリン(2011年)n=41	0%	4.9%	(4.9)	7.3%	87.8%	-
バイオリン(2023年)n=59	0%	19.4%	(19.4)	10.2%	69.5%	3.50

2011年調査ではウクレレ項目は設定していない。平均値も算出していない。
二重アンダーラインは最大値。1重アンダーラインは、次に大きい値。

【表15-1】所持教員免許 問2(7)中学校教科 n=61

	度数(人)	割合(%)
中学校免許以外	5人	8.2%
中学校音楽	41人	67.2%
中学校社会	7人	11.5%
中学校国語	2人	3.3%
中学校英語	3人	4.9%
中学校保健体育	2人	3.3%
中学校数学	1人	1.6%
合格	61人	100.0%

【表15-2】所持教員免許 問2(7)高校教科 n=61

	度数(人)	割合(%)
高校免許以外	19人	31.1%
高校音楽	32人	52.5%
高校社会	3人	4.9%
高校国語	2人	3.3%
高校英語	3人	4.9%
高校保健体育	2人	3.3%
合計	61人	100.0%

「どんどん新しいことに取り組みたい」「音楽の授業の幅が広がりそう」「色々なことに挑戦したい」「自分で考えたりリズムや音楽に親しむことや誰かと共有する時間は、子どもたちの表現の可能性を生かせる活動であり、楽器の音やメロディー等自分が心地いい音楽を見つける喜びを感じる楽しい活動」であると書かれていた。

3 2011年調査と本調査との相違点

ここで改めて、本調査と2011年調査との相違点をまとめてみたい。本調査は2011年調査と比べると、対象地域や学部を拡げ対象数も多い。調査対象者の属性は、2011年より教職経験や音楽担当者としての平均勤務年数は長い。また音楽免許を所持している割合は中学音楽で3割弱から7割弱に高くなり、ピアノをよく演奏できる人も2割強から5割弱に高くなっていった。しかし全く演奏できない人は両調査とも一定数いることは同じである。また、特別支援の免許所持の割合は5割強から上がってきているものの6割にとどまっている。音楽の授業は、課題別集団で授業をしている割合が低くなり、授業時間も画一化されてきていた。また音楽室以外で授業されることもあるが、その割合は低くなっていた。音楽の授業で大切にしたいことは、両調査とも、児童生徒が楽しめること、そして音楽的な興味関心や表現力を拡げることや他者との関係を作ることは共通していた。音楽づくりを実践している人は5割から6割に上がっている。音楽づくりを実践していない人の理由は、両調査とも、対象生徒には難しいからと回答している。しかし本調査では、音楽づくりの良さは分かるので、機会があればやりたい、そのために研修会に参加して具体的な方法を知りたいという熱い思いが欄外にまで記されていることが多かった。また音楽担当者の悩みは、音楽室や楽器が整備されていない体制面の問題とともに、音楽担当者自身が音楽免許がなく、音楽的知識や技能が不足していることは両調査に共通して回答されていた。また2011年調査になかったものは、語り合う仲間を望んでいることであった。さらに年間指導計画作成時に参考にしたものに違いが現れていた。2011年調査で多かった「学校独自の年間指導計画」と「自分の音楽経験や知識」が激減し、

反対に2011年調査では少なかった「特別支援学校学習指導要領」を参考にしている人が激増していたのである。

第4章 おわりに

本論文では、「音楽の授業で大事にしたいこと」「音楽づくりについて思うこと」「音楽の授業についての悩み」「特別支援教育の音楽について思っていること」「何でも書いてください」と5つの自由記述欄を設けたため、内容が重複していることがあった。

ここで改めて特別支援学校の音楽授業の実態と課題についてまとめてみたい。特別支援学校の音楽授業は、感覚過敏や固執性、そして自己表現が苦手な児童生徒を対象にすることが多い。また対象とする集団は、生活年齢も発達年齢も障害種別も様々であり、実態幅が広く人数も多い。そうした児童生徒たちが楽しめる教材を工夫し、個々のニーズに応じた配慮を行うことが必要である。しかし現状は音楽室も楽器も指導者数も不足している。こうした施設設備面、教員数の確保等の基本的な教育条件はすぐにでも整えられるべきである。さらに音楽担当者であっても音楽免許所持者でないことも多く、授業内容について悩み、その解決のために研修の機会を切望しているのである。上野ら(2022)の音楽実態調査でも、学校現場においては音楽づくりの充実やそのための研修機会の必要性が示されている。

また松村ら(2019)は、音楽授業の環境的な配慮として音楽教科としての専門的視点が必要であることを示している。しかし、特別支援学校の音楽の授業で必要なことは、音楽の専門教育を受けてきたことだけでなく、目の前の児童生徒が表現した音に耳を傾け、その思いを的確に捉えること、そして教員自身が音を使ったやりとりを楽しめる力である。こうした力を醸成するためにも、音楽づくりが果たす役割は大きいと考える。

本調査によると、音楽づくりを実践している人は約6割である。実践していない人は対象生徒の難しさを挙げている。たしかに発達の遅い児童生徒の場合や、障害特性があることによって、言

業でのやりとりやイメージを持つこと、あるいはメロディー作りや友達と合わせる活動は難しい生徒もいる。しかし自分が鳴らす音そのものに気持ちを向けること、言葉ではなく音でやりとりすること、非拍節的な音楽や、連続音、強弱や速度変化、その音に浸る活動等を視野に入れること、そして音楽のジャンルを拡げることで、対象となる児童生徒に適した音楽づくりを行うことは十分可能である。このためには、音楽担当者自身が創作の楽しさを体験することが必要である。

本調査における回答者は大きく2つの傾向に分けられた。1つは特別支援教育における音楽授業の魅力に既に十分に実感して、生き生きと日々の授業を実践している方々である。もう1つは、子どもたちが心から楽しめる音楽を実践したいと切望しているにもかかわらず自分には知識も実践力もない。だからこそもっと知りたいという熱い思いを持っている方々である。

どちらの思いにも胸が熱くなった。本調査で明らかになった特別支援教育における音楽授業の実態と課題を受けて、今後も実践的な研究を続けていきたい。

【謝辞】

校内課題山積で非常に多忙な中、アンケート調査の回答に御協力いただいた先生方、また各学校に郵送されたアンケート用紙を音楽担当者に渡していただいた先生方に、心から感謝の意を表します。

本研究はJSPS科研費 22K20230の助成を受けたものである。

なお本データ分析については、IBM SPSS Ver.29.0.1の統計解析ソフトウェアを使用している。

【参考文献】

上野智子・竹澤大史・近藤親子・菅道子『特別支援学校における音楽科及び音楽を活用した「自立活動」に関する実態調査』和歌山大学教職大学院紀要学校教育実践研究 No7 (2022)
 岡(黒田)ひろみ『特別支援学校における音楽づくりの可

能性－音楽授業に関するアンケート調査から－』滋賀大学大学院教育学研究科論文集第16号 (2013)
 岡ひろみ『特別支援学校における音楽づくり－楽器の特徴と生徒の発達の特徴との関連－』音楽教育実践ジャーナルvol.12, no.2 (2015)
 岡ひろみ『肢体不自由クラスにおける音楽づくりの意義と可能性－筋ジストロフィー症の高等部男子生徒の場合－』花園大学社会福祉学部研究紀要第31号 (2023)
 作田佳奈美・湯浅哲也・加藤靖佳『特別支援学校(聴覚障害)小学部における音楽科授業の取り組みに関する検討－音楽科を担当する教員を対象にした質問紙調査を通して－』筑波大学特別支援教育研究12 (2018)
 竹下可奈子・ズビャーギナ章子『視覚特別支援学校における音楽科教育の現状と課題についての予備調査－授業観察と教員への聞き取り調査を通して－』就実教育実践研究第11巻 (2018)
 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所『特別支援教育における教育課程に関する総合的研究－新学習指導要領に基づく教育課程の編成・実施に向けた現状と課題－』研究成果報告書 特総研B-360 (2021)
 松村日菜・樋口和彦・土井瞳・中村綾也佳『特別支援学校の音楽科授業の実態と展望－音楽担当教員に対するアンケート調査を通して－』教育臨床総合研究18 (2019)
 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』(2018)
 文部科学省『特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領平成29年4月告示』(2018)
 文部科学省『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編(幼稚部・小学部・中学部)平成30年3月』(2018)
 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説各教科編(小学部・中学部)平成30年3月』(2018)
 文部科学省『特別支援教育を担う教師の養成、採用、研修等に係る方策について(通知)』(2022)
 J.ペインター, P.アストン(山本文茂・坪能由紀子・橋都みどり訳)『音楽の語るもの(Sound and Silence)』音楽之友社(1970:1982)
 文部科学省『特別支援教育を担う教師の養成の在り方等に関する検討会議報告』(mext.go.jp) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/1700031.html
 2023.8.23閲覧

【資料1】問1(9) 音楽づくりの具体的な内容

<p>①作詞・作曲 《アプリ使用》3人 16人</p>	<p>「作曲(リズム作り・メロディー作り)」[高学年では日本の音階から音を選び旋律を作り箏で表現する]「作曲」「子どもが作曲したメロディーにアレンジを加えた」[高校芸術(音)シラバスの中で誰もが知っている短い曲を使って変奏の取り組み]「クラスのテーマソング作り(リズムや音程)」[旋律作り]「喜びのうたを二重奏に編曲(単障)」[5つくらい和音(コード)進行の上に、メロディーを自分で考えて創作する内容]「ペンタトニックでのメロディー作り」[ベース、伴奏、主旋律、合いの手の4パートに分かれて創作する]「卒業の歌作り、箏 日本音階で簡単作曲 リズム積み木」[ベース、伴奏、主旋律、合いの手の4パートに分かれて創作する]</p> <p>《アプリ使用》「GIGA端末を使って、ロイロノート(アプリ)を用いて簡単な曲作り」[タブレットを用いて簡単な旋律づくり]「タブレット端末のアプリケーションを使って、自分で考えて作る」</p>
<p>②リズム表現 13人</p>	<p>「ボディーパーカッション」(2)「低学年では」[リズムに言葉をつけて表現する学習]「身体リズム表現」[歌詞にできそうなワード選び(3歳後半から6歳程度のクラス)]「中1「リズムゲーム」(教育芸術社「中学生の音楽1」)」[リズムをつくる]「一定のリズムや言葉のフレーズに合わせて音を鳴らしてみたり」[楽器を使ってリズム表現を中心に作曲に取り組んだ]「音あそび(ストーリー性のある音楽を使って、自分で楽器を選んだり、リズムを作ったりしたフレーズを歌詞等に当てはめる活動)」[リズム作り]「リズムも色々と考えたり、班で話し合ったり発表しあったりしました。楽器はピアノ、ギターを使用しました」[リズムアンサンブル]</p>
<p>③打楽器アンサンブル 6人</p>	<p>「中学年では音の強弱や楽器の音色の組み合わせを友達と考えて作る打楽器アンサンブル」[色々な打楽器を使用して即興でリズムを作り出したり、模倣したりして1つの音楽をつくり出すという内容]「タンプリンアンサンブルとグループ毎にリズムカードを使って2~4小節程度のリズムを考え互いに発表」[音遊びとして東南アジアのトガトンを使って1人ずつリズムをつけて鳴らし音をつなげていく]「言葉(音韻)と口唱歌による打楽器演奏」[打楽器や手拍子で創作を含むリズム遊び(重複)]</p>
<p>④効果音作り 4人</p>	<p>「短いお話を作ってそれに合った効果音とどんな楽器で鳴らすとお話の効果上がるかグループで話し合いながら決めていき、実際にお話を一緒に鳴らしてみた。効果音がある時とない時の違いも話し合った。(打楽器のみで)」[効果音を楽器で表す]「場面(動画やイラスト等)にあった音(楽器)」[絵本(簡単な話)をもとに、イメージして楽器で創作をする]</p>
<p>⑤その他13人 《曲にあわせる》4人 《音探し》3人 《楽器作り》2人 《歌詞作り》2人 《音階作り》2人</p>	<p>《曲にあわせる》「指導者の奏でる曲にあわせて(生演奏に限らずiPadなども使う)」[自分選んだ楽器を奏でる。身体を動かす]「ドレミの歌に合わせてベルハーモニーを鳴らす」[サブの指導者の真似をしてリトミックの動作をする]</p> <p>《音探し》「偶然できあがった(触れてみた)ものを楽しむ。その後発表したい」[色々なものの音を鳴らしたり、どうすれば音が鳴るかしてみたり]「肢体不自由の児童だったので、秋の音を感じてもらいたくて、大量の葉を音楽室に広げ、その上を車椅子でゆっくり動かして音を楽しみました」</p> <p>《楽器作り》「あずき、米、大豆等様々な素材を透明な(のり)の箱に入れて好きな音の楽器づくりをし、その後、3パターンのリズムを鳴らし歌作りをした」[ビーズ玉や豆、米などを用いて色々な音を聴いた後、マラカスやレインスティックなどの楽器を作り、音楽とともに鳴らすなど]</p> <p>《歌詞作り》「歌詞の一部を好きな言葉に置き換えてオリジナルの歌詞を作った」[生徒たちに作詞をさせそれに曲をつけて文化祭での発表につなげた]</p> <p>《音階作り》「身近にある物で音階を作る」[ペンタトニック音階や琉球音階を使った鍵盤楽器の演奏]</p>

【資料2】問1(14) 音楽づくりを知るきっかけとなった理論や実践

「さいころを使ったメロディー作り」「ロイロノート(アプリ)」[リズムが中心・即興的に作って友達とつなげる]「リズム遊び、リトミック」[音楽セラピー・音楽療法]「中学音楽で学習する内容を発展、リズム、メロディー和音の作曲」「リトミックや合奏・歌の表現」[実際に演奏を児童生徒が聞いたり、たくさん打楽器に触れる]「参加型ワークショップ」[音楽づくり(即興演奏)のDVD視聴]「和音進行、メロディーの合わせ方。様々な音階について、曲作り、発表」[合唱研究会でリトミックも含むあらゆる子供が楽しめる研修]「リトミック 歌遊び 劇遊びなど」[トガトンを用いた実践。身近な道具を用いた創作ワークショップ]「作曲家による作曲のワークショップ」[民族音楽のワークショップ]「手作り楽器」

〔参考資料〕「特別支援学校音楽授業に関するアンケート調査」(お願い)

花園大学社会福祉学部臨床心理学科
専任講師 岡ひろみ

この度、令和4年から2ヶ年の科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)の交付を受け、研究課題名「特別支援学校の音楽づくりの現状調査と指導プログラム開発—学校・研究機関と連携して—」(課題番号22K0230)として、研究を進めております。

これまでの研究では、2011年度に滋賀県内の特別支援学校高等部13校を対象に、「高等部音楽授業に関するアンケート調査」を実施し、音楽授業の教育課程上の位置づけと、「音楽づくり」の実態と課題を明らかにしてきました。前回調査から10年を経たこと、また、平成29年に告示された特別支援学校学習指導要領音楽科の表現領域に、初めて「音楽づくり」が明記されたことを受けて、このたび研究対象学校・学部を拡げたアンケート調査を実施致します。

つきましては、ご多忙のところ誠に恐縮ではございますが、本アンケートに御協力いただきたくお願い申し上げます。

また本調査は上記課題研究のためのものであり、回答結果についての倫理面の配慮及び個人情報の取り扱いについては、科研費研究倫理綱領を遵守して統計的な集計を行い、学校名や個人が特定されない形で処理をして公表致します。また、調査者が所属しております大学倫理委員会での審査も経て実施致します。

なお、本調査の「音楽授業」とは、週時程や年間指導計画の中で「音楽」として表記されている以外にも「うた・リズム」や「リトミック」と称されている活動も含めてお考えください。

本調査用紙は3部同封しております。小学部・中学部・高等部の音楽授業を担当されている方の中から各学部1名、計3名の方式に御回答頂き、同封の返信用封筒に入れて2023年5月20日(金)を目途に御返送下さい。何卒よろしくお願ひいたします。

〒604-8456 京都市中京区西ノ京通ノ内町9-1
花園大学社会福祉学部臨床心理学科 専任講師 岡ひろみ
075-279-3597 (岡研究室)
075-811-9664 (代表FAX)
h-nokai@hanazono.ac.jp

特別支援学校音楽授業に関するアンケート

学校名	学部
-----	----

■1. 音楽授業についてお答えください。全て、令和5年度の事態でお答えください

(1) 音楽の授業集団を教えてください。(あてはまるものすべてに○をしてください)

1. 学部全体	2. 課題別クラス毎	3. 課題別クラスの合同	4. 学年別クラス毎
5. 学年別クラスの合同	6. その他 ()		

(2) 音楽の授業集団(クラス)についてお尋ねします。当てはまる項目に○を付け、()には数字を記してください。担当されているすべての集団(クラス)についてお答えください。

整理番号	合計時間数(～)分	週あたり授業回数(～)分	学年	発達年齢(概ね)	児童生徒数	サブ教員指導者も含め	授業の場所			
							音楽室	教室	フレイルーム	その他
1	週に()回 合計()分	()回 合計()分	()年生	()歳	()名	()名	音楽室	教室	フレイルーム	《 () 》
2	週に()回 合計()分	()回 合計()分	()年生	()歳	()名	()名	音楽室	教室	フレイルーム	《 () 》
3	週に()回 合計()分	()回 合計()分	()年生	()歳	()名	()名	音楽室	教室	フレイルーム	《 () 》
4	週に()回 合計()分	()回 合計()分	()年生	()歳	()名	()名	音楽室	教室	フレイルーム	《 () 》
5	週に()回 合計()分	()回 合計()分	()年生	()歳	()名	()名	音楽室	教室	フレイルーム	《 () 》

●1 週あたり授業回数・合計時間数とは、例、月曜日50分授業+水曜日30分授業であれば、「週に2回、合計80分」とご記入ください。

0

1

(3) あなたの所属している学部で音楽授業を担当する先生について、「はい」か「いいえ」のどちらかに○をしてください。4で「はい」の場合、常勤か非常勤どちらかに○をして下さい。

1. 音楽免許がある先生が自分の担任以外のクラスの音楽授業を担当している。	はい	いいえ
2. 音楽免許がある先生が、音楽の授業を担当していない。	はい	いいえ
3. 音楽免許がない先生が、音楽の授業を担当している。	はい	いいえ
4. 音楽教科専門の先生(専科)がいる。	はい(常勤・非常勤)	いいえ

(4) あなたの所属している学部で、音楽授業の主担当をされている先生はあわせて何人ですか。

() 人

(5) 年間指導(授業)計画作成時に参考にしたものは何ですか。(あてはまるものすべてに○をしてください)

1. 小中高等学校学習指導要領	2. 特別支援学校学習指導要領
3. 特別支援学校音楽教科書	4. 研修会や書籍から得た知識や自分の経験
5. 指導内容表や実践のまとめ等、勤務校独自に作成したもの	
6. その他 ()	

(6) 音楽の授業で大事にしたいことは何ですか。

.....

.....

.....

(7) 平成29年告示の特別支援学校学習指導要領音楽科に、「音楽づくり」が初めて明記されたことを御存知ですか。(どちらかに○をしてください)

1. 知っている	2. 知らなかった
----------	-----------

(8) あなたは今まで音楽授業(サブ指導者で入っている場合も含む)で、創作、音あそび、作曲等の音楽づくりの授業をされたことがありますか。(どちらかに○をしてください。)

1. あった	2. なかった
--------	---------

(9) (8)で「あった」と答えた方にお聞きします。どのような内容の授業ですか。(このあと問(10)、(11)はとばして、問(12)にお進み下さい。)

.....

.....

(10) (8)で「なかった」と答えた方にお聞きします。それはなぜですか。(どれか1つに○をしてください)

1. 対象生徒には難しいから	2. 対象生徒にはやさしすぎるから
3. 考えたことがなかったから	4. どんなことをすればよいか分からないから
5. 機会があればだろうと思っていた	6. その他 ()

(11) (8)で「なかった」と答えた方にお聞きします。今後、音楽づくりをしたいと思われませんか。その理由も教えてください。

1. 思う (理由)
2. 思わない (理由)

(12) これまで、音楽づくりの理論や実践を知る機会がありましたか。(どちらかに○をしてください)

1. あった	2. なかった
--------	---------

(13) (12)で「あった」と答えた方にお聞きします。それはどこですか。(あてはまるものすべてに○をしてください。)

1. 今勤務している学校	2. 以前勤務していた学校	3. 研修会(ワークショップ含む)
4. その他 ()		

2

3

特別支援学校音楽授業の比較調査研究

(14) (12)で「あった」と答えた方にお尋ねします。どんな内容の授業や研修でしたか。

(15) 今後、音楽づくりを進めていくために必要なことは何だとお考えですか。
(あてはまるものすべてに○をしてください。)

1.演奏家の派遣	2.アドバイザーの派遣	3.楽器をそろえる
4.音楽づくりの研修会（理論）	5.音楽づくりのワークショップ（実技）	
6.その他 ()		

(16) 音楽づくりについて思われていることを何でも自由にお答えください。

(17) 今後、どのような内容の音楽の研修会に、参加されたいとお考えですか。

(18) 音楽の授業について悩んでおられることや考えておられることを教えてください。

4

■ 2. 次に、アンケートを御記入いただいている先生ご自身についてお聞きします。

(1) 教職に就いて何年目ですか。（講師経験含む）

() 年目

(2) 今までに勤務された学校種別や学部はどこですか。
(あてはまるものすべてに○をしてください)

1. 幼稚園	2. 小学校	3. 中学校	4. 高等学校	5. 特別支援学校（養護学校）小学部
6. 特別支援学校（養護学校）中学部	7. 特別支援学校（養護学校）高等部（高等養護学校含む）	8. その他 ()		

(3) これまでの教職経験の中で、音楽の授業の担当経験はのべ何年ですか。

のべ () 年 → その内、現所属学部での担当経験のべ () 年

(4) 先生ご自身の楽器演奏についてお尋ねします。回答については主観的な判断で結構です。次の楽器についての演奏経験について、あてはまる番号1つに○をつけてください。

楽器の種類		1.よく演奏できる	2.少し演奏できる	3.あまり演奏できない	4.全く演奏できない (経験無し)
1. ピアノ		1	2	3	4
2. エレクトーン		1	2	3	4
3. ギター		1	2	3	4
4. バイオリン		1	2	3	4
5. ドラム		1	2	3	4
6. ウクレレ		1	2	3	4
7. その他	楽器名1 ()	1	2	3	4
	楽器名2 ()	1	2	3	4

5

(5) 中学校・高校・大学で音楽関係の部活やサークルに所属していましたか。
(どちらかに○をしてください)

1. 所属していた	2. 所属していない
-----------	------------

(6) (5)で「2.所属していた」に○をされた方にお尋ねします。あてはまる番号に○をしてください。あてはまる番号がない場合はその他の欄に記入してください。

1. 吹奏楽（ブラスバンド）	2. 軽音楽	3. 邦楽（華曲・太鼓・雅楽等）	4. オーケストラ
5. 合唱	6. アカベラ	7. ハンドベル	8. その他 ()

(7) あなたが所持されている教員免許の種類・教科は何ですか。あてはまるものすべてに○をつけ、複数教科を所持されている場合は () にすべて記入してください。

1. 幼稚園	2. 小学校	3. 中学校教科名 () () ()
4. 高等学校教科名 () () () ()	5. 特別支援学校（養護学校）6. その他 ()	

(8) 自由記述欄
特別支援教育における音楽について、思っておられることを何でも書いてください。

*アンケートの回答は以上になります。ご協力ありがとうございました。

6

7

【注】

- i 1つの学校に複数の学部がある場合、その学部数に合わせた複数のアンケート用紙を配布した。学校回収率とは、そのうち1部でも返送された場合は、該当校から返送されたとカウントした場合の回収率のことである。
- ii 高等特別支援学校（高等養護学校）は高等部だけの学校である。病弱特別支援学校は義務教育段階の小中学校だけの学校である。知肢併置特別支援学校及び盲・聾学校は3学部+分校や分教室や院内校舎等が併設されている場合もある。運営組織毎に1部ずつ配布した。学部等の総配布数は108部である。
- iii 準ずる教育課程の場合、基本的には免許を所持している教科の授業を担当する。このため正規の教科教員がない場合は、該当教科のみを担当する非常勤講師が担当することがある。
- iv 特総研（2011）は、特別支援学校の準ずる課程の場合、小学校、中学校の標準時数60時間より少ない科目としては、特別支援学校（聴覚障害）のみが51.3時間として示している。高等学校は、標準単位数を超えて担当している教科は芸術（音楽1）が該当していた。現行版の学習指導要領では、小学生の標準時数は学年による違いはあるが、1回45分授業を週2回程度、中学校は1回50分の授業を週1回程度と定められている。
- v 『特別支援学校学習指導要領解説総則編』（H30）では、冒頭に「創意工夫を生かした特色ある教育課程を編成・実施されるようお願いしたい」と文部科学省初等中等教育局長高橋道和は記している。また今回の学習指導要領の改訂では、「学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくカリキュラム・マネジメントを通じて教育課程の評価と改善につなげていくよう求められている」と学校裁量について記されている。
- vi 作田ら（2018）は聴覚障害小学部に焦点を当てた質問紙調査から「聴こえへの配慮とともに音楽は楽しいという気持ちを育てること」の大切さを指摘している。
- vii 分母：中学校教員免許所持者数、分子：中学校音楽免許所持者数の割合である。
- viii 分母：高等学校教員免許所持者数 分子：高等学校音楽免許所持者数の割合である。
- ix 分母：教員免許所持者数 分子：特別支援学校教員免許所持者数の割合である。
- x 文部科学省調査（R1）では令和元年5月1日現在、特別支援学校教員 69,508人（前年 68,667人）のうち、当該障害種の免許状を保有している教員 57,719人（前年度 54,810人）の割合は83.0%（前年度 79.8%）と報告されている。また文部科学省（R4）では、特別支援教育を担う教師の専門性の向上のために「特別支援学校

の教師の免許保有率 100%を目指して引き続き取組を進める」と記されている。